

という村（ウィーンの南東、ハンガリーとの国境近くにある）から始まってウィーン、パリ、ジュネーブ、ワイマール、ブダペスト、ローマ等々。それに加えて東はロシア、西はポルトガル、南はイタリア、北はイギリス、とほぼ全てのヨーロッパ諸国をピアニストとして訪問している。「国際人」のはしり、ともいえるだろう。しかしその代償として自分の安住の地、「故郷」を永遠に失ってしまった。

リストは旅行中にこじらせた風邪が原因となった肺炎によって、リヒャルト・ワーグナーと再婚してバイロイトにいた次女コジマのもとで客死している。晩年は視力も相当に衰えていたようである。華やかであった若い時に比較しても、リストが生涯を通じて与え続けてきた人間と音楽への愛情と、そのために払ってきた数多くの犠牲を考えてみても、それに見合うような安らかな最期ではなかったようだ。それは今からほぼ一世紀前、一八八六年のことであった。

## ペプツパソピ。

ウィーンは今まで何世紀もの長い間、様々な文化、中でもとりわけ音楽の中心として栄えてきた。ウィーンを本拠地として活躍した音楽家を総称して「ウィーン楽派」と呼ぶこともあるが、一般的には今日に至る歴史の流れの中で特にふたつのエポックを中心に活躍した音楽家達に使用される事が多い。

そのうちのひとつは、言わずと知れたハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトなどの音楽の世界である。十八世紀から十九世紀にかけて彼らが創造した芸術は、ドイツ古典音楽の最高峰として永遠に輝き続けるであろう。

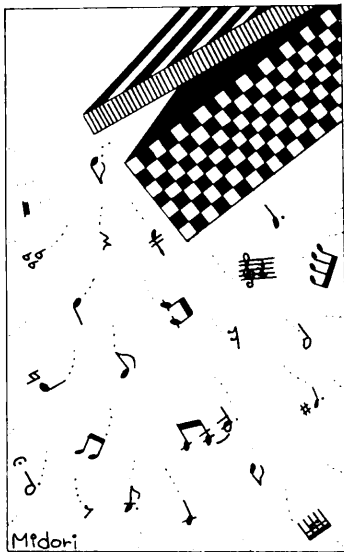
もうひとつは、十九世紀から二十世紀にかけてこの地で活躍した作曲家達に対して使用される「ウィーン楽派」という名称である。前者との混乱と誤解とを避ける為に、こちらを特に「新ウィーン楽派」あるいは

「第二次ウィーン楽派」と呼ぶ事も多い。広義にはブルックナーやマーラーも含まれるが、その代表は何と言ってもシェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンという三人の作曲家である。

これらの作曲家とその一派の残した作品の多くは、いわゆる現代音楽と呼ばれるジャンルに属するため、一般の音楽ファンには比較的馴染みが薄いであろう。しかしシェーンベルクがその基礎を固め、ベルクとヴェーベルンがその弟子、また良き協力者として築きあげた「十二音技法」という新しい作曲技法は、第二次世界大戦以降の西洋音楽に決定的な影響を与えている。

この技法は、オクターブの構成音である十二の半音に同等の重要性を与え、主題となるメロディーの中で必ず全音過不足なく使用しよう、というもの。要はドから半音ずつ上がってシの音まで十二種類の音をひとつずつ書いたカード（計十二枚）を用意して任意に混ぜ合わせ、順不同になったところでそれを机の上に並べ、端から五線譜に書き取っていくようなもの、と思えば良い。（この方法は十二音技法の課題に行き詰まった学生に限らず、プロでもスランプに陥った時にはこっそり行ってみるインチキでもある）当然の事ながら、この音列はピポパペプ…（でもいったような訳の分からないものになるが、この場に及んであきらめてはいけない。ここに芸術的価値を付加処理するのが作曲家の腕の見せどころ（？）であろう。

このような暴論を吐くと必ず良識ある作曲家諸氏から苦情が出るのだが、冗談はさておき、この三人の作曲家のプ



ロフィールを簡単に紹介しておこう。

アーノルド・シェーンベルクは一八七四年ウィーンに生まれた。新ウィーン楽派の代表格だが、十五歳の時に父を亡くして家計が貧しかった事もあり、専門的な音楽教育といえ、彼が二十歳の時に二歳年上のツェムリンスキーというウィーン生れの作曲家兼指揮者に数ヶ月「対位法」という作曲の基礎技法を習ったにすぎない。独学でヴァイオリンとチェロを弾いたが、画家としての資質も兼ね備え、自画像などをはじめとする優れた絵画も残している。

ナチスの台頭とともに進歩的な芸術家達に対する圧迫が各地で強くなり、ユダヤ人であったシェーンベルクは一九三三年、ナチスが政権を得るに至って最初はフランスへ、さらにアメリカに亡命、その後ヨーロッパに戻ることもなく一九五一年ロサンゼルスで亡くなった。

シェーンベルクはかたくなな性格の理論家でもあったようだ。一種独特の近寄り難さはその音楽の中にも感じ取れるが、それだからこそ西洋音楽の流れを決定的に方向づける技法を完成し得たとも言えよう。彼の作曲したオペラ「モーゼとアロン」はウィーン国立歌劇場のレパートリーにも取り上げられている。

一八八五年ウィーン生れのアルバン・ベルクは音楽的、また性格的にもシェーンベルクとは相反する位置にある作曲家だ。豊かな家庭に生まれ、若い頃は文学に興味を覚えた。音楽は兄と妹にも刺激されて勉強したが、専門学校には入らなかった。十五歳にして独学で作曲を始め、その作品に歌曲が最も多いのはベルクが終生興味を持ち続けた文学の影響によるものであろう。

シェーンベルクとの出会いは一九〇四年の事である。兄が新聞広告を頼りにシェーンベルクを訪ね、弟の作品をこっそり見せたのがきっかけであった。この時から数年間ベルクはシェーンベルクの教えを受けるが、その後はヴェーベルンと同じくシェーンベルクの良きパートナーとして、十二音技法を完成させる重要な役

割を果たしている。

作風には後期ロマン派、あるいはウィーン的ともいえる爛熟した頹廢的な香りが感じられる。オペラ「ヴオツェック」は、その音楽的内容の濃密さもさることながら演出家にとっても手応えのある作品で、どこの劇場でも新演出が発表されるたびに、過激な演出についての賛否両論がたたかわされるのが常である。

喘息の発作に悩まされ、病氣勝ちであったベルクは、十八歳の時に失恋を苦にして自殺を試みたことから想像できるように傷つきやすい性格であった一方、自分が欲しい、と思った物を手に入れるには社会一般のモラルなど眼中になくなってしまいうような情熱家でもあった。一九三五年にウィーンで敗血症のため病死している。

一八八三年ウィーン生まれのアントン・フォン・ヴェーベルンは、三人の中で一番地味な存在であろう。ヴェーベルンの音楽が世間一般に知られるようになったのも、彼の死後の事である。平凡な指揮者、また教師としての経歴からは想像もつかないが、彼の作品は二十世紀後半の現代音楽に一番影響を与えているかも知れない。

弱音の中でデリケートな陰影を揺るがせながら漂い、醸し出される音楽は、聴衆をして思わず息を殺し、耳をそばだてさせずにおかぬほど色彩感濃いものであり、後に発達する電子音楽を予感させる。極端に圧縮された内容の作品はどれも短く、比較的長いものでさえ十分程度である。

シェーンベルクとの出会いはベルクと同じく一九〇四年の事であり、一九〇八年までシェーンベルクに師事した。師と同様にナチスの迫害を受け、一九三四年ドイツ・オーストリアでの指揮活動を禁止された上、一九三九年には教職さえも奪われ、逼迫した生活を余儀なくされた。元来もの静かな性格のヴェーベルンは、音楽における神秘性をこの頃一層深めていったようである。

第二次世界大戦終戦後はザルツブルク近郊の村に住んでいた娘のもとで、人々からは全く忘れ去られて耐

乏生活を送っていたが、終戦後まだわずか数ヶ月しかたっていない一九四五年九月十五日夜、この地区を占領していたアメリカ軍の憲兵が誤って発砲した銃弾に当たって不遇の死をとげた。

新ウィーン楽派の功績にくちばしを挟む気は毛頭ないが、十二音技法の台頭とともに作曲という行為がより細分化され、一層精密な職人的技巧を要求されるようになってきた観がある。楽しい、悲しい、苦しい、嬉しい、といった万人に共通の感情が万国共通の言語「音楽」によってではなく、作曲家個人個人が考案した独自の言葉で表現されるようになったため、音楽がより難解な、とっつき難いものになってしまったような気がする。塩は世界中どこでもしょっぱく、砂糖は甘いものだが、これをたとえば色彩に置き換えて、黄色を見たらしょっぱいと思え、ピンクは甘いぞ、と突然つきつけられてもその関連を理解できるまでに時間がかかる。いわんや頭では理解できたとしても、それが自分の感覚と一致するかどうかは別問題である。

聞いていて涙するような現代音楽にはなかなかお目にかかれないが、つくづく残念な事である。

## ウアテキスト

自分の心と頭の中から湧き出てくるイメージを紙上に書き記していく「作曲」という作業は、膨大な手間と時間にかかる、根気無くしては実現不可能な仕事である。しかしその手書きのオタマジヤクシを楽譜として印刷出版できるようにするまでの一連の作業も、なかなか一筋縄ではいかぬ、苦勞の多いものである。

存命中の作曲家の作品を出版する場合は、まだ問題もそれ程複雑ではない。普通は作曲家自身が印刷校正も行なうため、出版された譜面にミスがあったとしても自己の過失となるだけだ。